

## 福音の自由と他者への思いやり

エルサレム教会から来た或る人たち、すなわち、ユダヤ教の伝統に依然として固執していた教会内のユダヤ主義者たちが、アンティオキアにやって来て、異邦人もモーセの慣例に従って律法を守り割礼を受けなければ救われないと主張したという出来事は、異邦人が大部分を占めていたアンティオキア教会に動揺を引き起こした。パウロ、バルナバとこれらユダヤ主義者との間に激しい対立と論争が起ったが決着がつかず、そこでエルサレムによってこの問題を協議することになった。

こうして開かれたのが最初の教会会議、即ちエルサレム会議であるが、パウロとバルナバはこの会議で、反対派の要求に一步も譲らず福音の真理、すなわち、人は皆、ユダヤ人も異邦人も区別なく、神の前に罪を負った存在であり律法の行ないによっては決して義とされず、ただ罪の贖いを成し遂げて下さった主イエス・キリストを信じる信仰によってのみ救われるという福音の真髄を強かに主張していった。

使徒ペトロもまた、異邦人コルネリウスの回心と救いの出来事を思い起こすように促し、パウロとバルナバの主張を全面的に擁護した。この強力な援護射撃の前に反対派は黙ってしまった。最後に、会議は、長老ヤコブの提案を受け入れ、異邦人は異邦人のまま主にある兄弟として受け入れること、ただし、異邦人キリスト者たちが、各地に散在するユダヤ人たちの宗教感情を十分考慮し、ユダヤ人たちの宗教的伝統や習慣に抵触するようなことを出来るだけ避けるように、との書簡を異邦人諸教会に送ることを決議した。

このヤコブの提案は非常に賢明な提案であった。これは異教社会における福音の宣教の問題、または異教の環境の中に生きる今日のキリスト者にとってもいすべき大切な教えだと思う。すなわち福音によって与えられる自由と他者への配慮(愛)の問題である。

キリスト者はイエス・キリストとその恵みによって、過去の忌まわしい生活、異教的な迷信や因習、様々なオキテや習慣から自由にされた。しかし、自由にされたということは、今や自分のしたことを何でも自由にしていよいことを意味しない。与えられた恵みと自由にはいつでも他者に対する責任が伴う。福音の栄光が損なわれないように、人々に躓きを与えないように、福音の本質とは関わりのない事柄、例えば、生活様式、習慣、伝統を異にすることから起るであろう様々な軋轢を出来るだけ避けるように、宣教において、生活において、キリスト者は他者に対する思いやりと配慮をいつも持ち続けるようにしなければならない。

このキリスト者の愛と自由の問題は、使徒パウロの宣教の働きの過程で、異教社会に生きるコリントやローマの信徒たちにこんこんと教えた大切な課題でもあった(第1コリント8章、ローマ14章参照)。キリスト者は福音において自由にされたものであるが、他者に対する愛のない自由は人を傷つけ、思いやりと配慮のない自由は人を躓かせるものであることを覚えよとのパウロの教えは今日の私たちも深くおぼえなければならない教えである。